

ランチルームとバスストップ

～アメリカの子どもの本音の世界～

入江 礼子

E・L・カニグズバーグの本に『エリコの丘から
(原題 Up From Jerico Tel)』というものがあ
る。この本の主人公はジーンマリー。十一歳。テキサ
スからロング・アイランドに引越して来たばかり。九
月の新学期から、シンガーグロブ中学校に転入する
が、転入生のため、三週間経っても友達が出来ない。
カニグズバーグは、このことを直接書き表さず、こう
いう言い方をしている。一か所は、「シンガーグロー
ブ中学校に来て三週間経っても、私はまだお昼を一人
ぼっちで食べていました」というもので、もう一か所
は、「私はいつも自分の降りるバス停で一番に降りま
したし、降りたらすぐ下をむいたままバスの方を振り
返らずに、すぐに家へとむかいました」というもの
だ。すーっと読んでしまえば何の変哲もない部分なの
だが、私はこの箇所で、「やっぱり」という念を禁じ
得なかった。

「ランチルーム」と「バスストップ」、この二つの
場所は、私が住んでいたアメリカ南部のアトランタ市

郊外の学校のみではなく、他の多くのアメリカの地域でも、「大人の目の余りとどかない」また「子どもの論理がむき出しになる」ところであるらしい。ジーンマリーのような転入生にとってこの二つの場所程敵しい所はない。ランチルームというのは小学校の低学年ではいざ知らず、それ以上の学年の子ども達にとって、クラス全体がどこへ座るかは決まっています、個人の座る席までは決まっていない。従ってまだ友達から誘いのかからない子は、一人ぼっちで昼食をとるしかない。それと同様に、スクールバスのバスストップも友達のない子は、ただポツネンと孤独をかみしめるしかない場所なのだ。

よく日本の社会は管理社会であり本音と建前が別々で、外国人などには分かりにくい社会だと言われる。しかし、こと子どもの社会、それも学校内の社会では、むしろアメリカの方が、管理、つまり大人主導が徹底しているように思う。そんな状況の中で、それが及ばない数少ない場所がランチルームでありバス

トップなのである。

読者の中にはアメリカの小学校・中学校の中に足を踏み入れられた方もいらっしゃると思うが、多分、校内に入って一番最初に受ける印象は、その「静かさ」ではなかったかと思う。私共のお世話になった二つの小学校（幼稚園・二年生と三年生・五年生にたまたま分かれていた）では、日本の幼稚園の飾り付けを思わせる季節のディスプレイが廊下の壁や教室内を飾り、廊下を走っている子は皆無、皆、整然と一列になつて教室間を移動していた。日本の休み時間の喧騒や廊下を走る子どもの姿を知る私にとっては、この静かさは、かなりのショックだった。その上、大人に対してにこやかな子ども達は、ちょっと顔見知りになれば、「ハロー、ミズ・イリエ！」と気安く声をかけてくれ、話す時の態度も、モジモジすることがなく、私などは「ウーム。何ときちんとしていることだろう。」などと感心してしまった程だ。しかし、その一方で、「でも待てよ。この姿何かに似ている……」何

に似ているのだろうかと思いつついたのだが、ある時、それはアメリカの家庭で飼われている犬達にそっくりなのだということが分かった。

アメリカの犬はこれまた日本の犬とは違って、主人が吠えるなど言った人の前で吠えることなど決してない。もちろん自然にそうなるのではなく、幼犬の時、ドッグ・オビエディエンスという訓練を飼主ともども受け、(飼主の中には、こんなに厳しいのは犬がかわいそうだからやめると言っていて途中でやめる人も中にはいるのだが)徹底的に、飼主の言うことをきくようにしつけられる。家の中では、主に大型犬が飼われているのだが、そのほとんどすべてが実に礼儀正しい。(犬にも礼儀という言葉が使えればの話なのだが)その犬達と、学校の中にいる子ども達の表情が、イメージとしてだぶってしまうのだ。

それでも、子どもを現地の学校にいられてからしばらくの間は、「なんと気持ちのよい子ども達なのだろう」としか思っていなかった。

やがて、我が子達が、学校に慣れはじめると、色々な不平不満が出て来た。「○○は、鉛筆貸してって言ったから貸してあげたのに全然かえしてくれないよ」「今日もバスストップで、チャイニーズ、ジャパニーズって言うあの嘶し歌があるでしょ、あれ歌われちゃったんだ」等々。私はその話を聞いて、「ちょっと待って。でも○○ちゃんて礼儀正しいじゃない。本当にそんなことしたの?」と思わず聞いてしまった。「お母様は知らないのよ。みんな先生や大人の前に行くくと、いい子ブリッ子になっちゃうからね。だまされちゃだめよ」……ウーム、本当かな? と半信半疑のまま幾日もが過ぎていった。

「みんないい子にみえるけどなー……」
「そうじゃないの。何回言ったら分かるのかなあ。もちろんやさしい親切な子も何人もいるわよ。でもそうじゃない子もいっぱいいるのよ。特に、ランチルームや、バスストップじゃあ、それがはつきりするのよ。先生も誰も見ていないからね」と子ども達。

長女が七年生になり、中学校へ行くようになって、ランチルームで誰と食事するかは、深刻な問題となり、丁度冒頭で述べた、ジーンマリーのように、一人さみしく昼食をとるといふことも、経験していたようだった。この年、新たにもう一校中学校が新設され、長女が一番仲良しは、そちらの中学校の区域というところで離ればなれになってしまったという事情があった。「ランチの時間さえなければな」と毎日のようにブツクサと言ひ、幼稚園の時にこちらに来て、そのままのお友達と小学校生活を送っている次女や、地元サッカーチームに入っている関係で、クラスの内外に顔見知りの多い長男とは、対照的に暗いランチの時間を送っているように見受けられた。

ところで、朝の登校時間のあたりに町を車で走らせると、バスストップには、スクールバスを待つ子ども達が三々五々集まっているのが目につく。ふと見ると、ポツンという日本人の子ども。現地に長い日本の子ども達は友達（アメリカ人の）とにぎやかに過ごして

ているが、そうでない子は沈黙の時を過ごさねばならない。誰も手をさしのべてくれない時間だ。ジーンマリーも、バスを降りたら、ひたすら家へ向かって帰る



しかなかったのだ。多分、彼女の後ろには、楽しみにおしゃべりをしながら家路につく子ども達の一隊があったことだろう。

さて、我が家の子ども達のブックサが本当であるらしいと思いはじめたのは、私自身が我が子がお世話になっている学校に、ボランティアとして出るようになってからである。

アメリカの学校は、本当に好意的に、又、いとも簡単に親をボランティアとして受け入れてくれる。日本の学校のPTAも立派なボランティアであるが、アメリカのものはもっと懐深く、柔軟である。仮に、これが日本だとして、日本語もタドタドしい外国人を、学校がボランティアとして受け入れてくれるかどうか……。答えは大方否であろう。でも彼らは、そんな私を受け入れてくれた。

滞在した四年間、様々な形で、彼らは私が学校や子ども達とかかわることを認めてくれた。

一年目はESL(English as a Second Languageの略)の先生のヘルパーと、ラーニングセンター(Learning Center)という父母で組織した勉強に遅れのある子どもを取り出して面倒を見る組織に名前をあげて入れてもらった。ESLの方は、先生がこの道十年のベテランの方で、本当はヘルプなど何もないのだが、「日本人の親を育てる」つもりで、御自分のクラスを解放して下さっているという感じだった。私は子どもと一緒に英語を習わせて頂いたようなものだ。

一方、ラーニングセンターは、三、五年生の通っている小学校にあったが、私はアメリカに來たての新生の日本人の勉強を助けるという役割だった。このラーニングセンターで、私は、ここに通って来る現地の子ども達のおかれている状況の厳しさにびっくりしてしまった。或る時、ラーニングセンターに通っている子ども達だって、何かちゃんと出来るんだということとを全校に示そうということになった。アメリカ人の

ディレクターと日本人のボランテニアをしている母親が中心となって、「浦島太郎」の劇をしようということになり、日本人の子どもは英語で、アメリカ人の方は日本語でというダブルキャストでやることになり、練習が始まった。

いつもは、学校の勉強についていけないとか、又、家に帰っても宿題が出来る環境ではないということ、このセンターに来ている子ども達が、がんばって日本語のセリフをすっかり覚えて劇に臨んだ。皆日本人の母親達と二人三脚でやった子ね、学習障害児ということでここに来ているの。でも、セリフもすぐかったわね。ちゃんと覚えられたのねえ」とディレクター。私は、それまで、その子がするように言われているということを知らなかったのだが、その場で考え込んでしまった。本当に学習障害児なのだろうか。私の感じでは、物覚えは決して悪くないのである。「彼は里親に育てられているの。その里親の関係で、今回

の劇の練習（放課後にしていた）が終わった時間に迎えに来てもらえないのよ。劇も見に来てもらえなかったわ。彼はちょっぴり不運なのかもしれない」こんな話をアメリカ人から聞いてしまった私は表面的には平和に見える学校の中にも、様々な問題が渦巻いていることを知る最初の機会となった。この町には中流の中から上の家庭が多く、その水準を維持するために、まわりの町よりも物価が少々高く設定されている。こういうことはちょっと日本では考えられないが、彼らは、自分達の地域を守るために、こういうことまでするのである。そういうことまでしているため、この町はアメリカでも例外的に安全な町として知られていた。町並も、日本の別荘地を思わせ、静かで住環境としては申し分がない。だが、そういう場所ですら、今、アメリカがかかえている様々な問題からのがれることは出来ていないということを感じさせられたのである。

私は、次女が一年生になると、彼女のクラスのボラ



ンティアを申し出た。すると先生はクラスの前のエリアと呼ばれている比較的広い廊下においてある丸テーブルの所で、一グループ五、六人ごとに日本に関係の

あることを何か教えて欲しいといわれた。そこで私は毎週一回、子ども達と折り紙をしたり、簡単な日本語を教えたりすることにした。低学年は学級内でグループに分かれて学習をしているのだが（生徒二十名に先生二人）、そのローテーションの中に私のコーナーも組み込んでくれたわけである。子ども達ははじめのうち、私のわけのわからない訛りの強い英語に閉口しているようであったが、そこは子どもものこと、慣れてくれば察しも早く、最初のうちは静かだった子ども達もにぎやかに折り紙などを楽しんでくれるようになった。そんな或る日、子ども達のがりはじめてワイワイとなると、突然、私達からちょっと離れた空間で、学校の事務のボランティアをしている母親がやってきて、「シート、シッシー」と指を口にあて「静かに。もし今度うるさくしたら、あなた達の楽しみの折り紙の時間は、なくなることになるのよ!」と言われた。子ども達は、サッと黙り、又、黙々と折りをはじめたが、又、興に乗ってくると、どうしても、手も足も

口も動いてしまふ。そういう時の子ども達の表情は実に生き生きとしている。静かな、礼儀正しい、あの飼犬のような大人しい表情はそこにはない。もう子どもそのもの。しかし、その子どもそのものになると、例の母親がやってきて、「シート、シッシー」となる。

私は間に入ってどうしようと思ったが、(うるさいと言ったって、別にひびきわたるような大声を出しているわけじゃなしという思いが私の方にはあったので)こうなったら買取作戦とばかり、その日に折った折り紙のプレゼントをすることにした。しかし、敵もさるもので、とっても喜んでいつも受け取ってくれるのだが、子ども達がちよっぴりうるさくなる度に注意に来るといふことは、学年末まで続いた。

私は、ここで、子ども達がポロップポロツともらした言葉に、彼らが置かれている状況をかい間見た気がした。「私、ニュー(転入生)なの。お母さん達ディボース(離婚)したから、私は、お母さんについてここに来たんだ」とあっけらかんというエミリー。家に

帰って娘に聞くと、「そうよ、エミリーだけってわけじゃないんだもん、私の友達には、そんな子いっぱいいるよ。エリカのお母さんなんか、次のボーイフレンドとも別れかけてるっていつてたわ。ねえ、お母さま、うちはディボースしないよね？」これが、小学校一年生の最も大きな、かつ一般的な心配事のようなのである。

さて次女は二年生に。ここで私が先生にたのまれたことは、算数のテストの採点だった。毎週一回決まった時間にクラスに行つて、テストの採点をする。

ところで、テストの結果を親に採点させるなど、日本の常識では考えられない。でも、こういうことなら親にも出来るというのが、先生の考え方であったようだ。お昼にかかるような時、私は、時々ランチルームで昼食をとることにした。さて、アメリカの学校で唯一、子どもの元気なしやべり声、喧騒が聞こえてくるのは、このランチルームであることは前にも述べた。私は、この喧騒がなつかしく、ペチャクチャお昼もそつ

ちのけでしゃべり合いふざけ合う子ども達の姿に、
とつても子どもらしさを感じてここが好きだった。

ある日、友人のアメリカ人とパツタリ学校内で会ったので、「お昼、ランチルームで食べない？」と誘うと、「私、あのうるささが我慢出来ないのよ。悪いけど遠慮しとくわ」という返事、そういえば、先生達も、低学年の先生は、クラス周辺にいるが、ちょっと学年があがると、先生同士まとまって子ども達とは別のテーブルで食べていたり、ティーチャーズ・ラウンジという先生用の小部屋で食事をとっている先生もいる。ランチルームにとどまっている先生も、教室にいる時程うるさくないので、子ども達のケンカも時には起こる。

やがて娘が三年生になったが、今度は、娘のクラスではなく、日本語を教えるプログラムのヘルパーとして隣の小学校に行くことになった。ジーナさんという私の友達が、その先生に採用されたので、私は主に発音係ということで手伝うことになったのである。

しめたつ、これで週一回は必ずランチルームで子ども達の本音の部分とつきあえるかなと思ったのも束の間、ジーナさんは、「私、あの子どもの声ダメなのよ。お昼はティーチャーズ・ラウンジにしましよよう」ということで、せっかくのチャンスも水の泡。

だが三か月後、彼女は体調をくずして、かわって私がピンチヒッターでその授業を受け継ぐことになった。二年生四クラス。どういうわけか興に乗るとワイワイとなり、クラスの先生に、「シート、シー」といわれることもしばしばだったが、子ども達との距離は縮まったように感じていた。しめたつ、ランチルームで食事のチャンスの到来と、その頃の私は、日本語を教えにいくのが楽しみだった。「コンニチハ、センセイ、ハイ、ミズ・イリエ、ここに座って」と二年生の子ども達と呼んでくれる。一番強引なのはクラスでは大人しいミッシェル。ついには、彼女の隣の席が、私の指定席のようになってしまった。

或る日、いつものように食事をしていると、

「ねえ、お姉さんに赤ちゃん生まれたの?」

「えっ、じゃあ貴女は、おばさんになっちゃったのね。おめでとう」

「うん、でも、お姉さん十八なの。それに赤ちゃんのお父さんは、どのボーイフレンドだかわかんないんだ。ドラッグやってたし。(ドラッグとは麻薬のこと)だから、今一緒に住んでいるのよ」

「……」

重苦しい内容の会話のはずなのに、妙にサラッとしている。余りサラッとしているので、私は逆に、問題の根深さ、日常性を感じさせられてしまった。

ランチルームとバスストップ。大人の目のゆるいところで子ども達は、良い意味でも悪い意味でも本音を出して生きている。そういう場に出くわした私は、我が子が、学校から帰ってきて話す内容にも真実を感じ、一体、こういう子ども本来の部分にきちっとつき合っているのは誰なのだろうと考え込んでしまった。

アメリカは広大な国なので、この南部の二、三の学校のことがすべてにあてはまるわけではない。しかし、大人は、大人の論理で子どもが、その枠から出ることをピシッとシャットアウトしている。そういう文化土壌といったらしまえばそれまでだが、そこになに子ども達の息苦しさを私は感じてしまうのである。

日本の子ども達とは全く違う息苦しさを持っているアメリカの子ども達、表面が明るくきちんとしている分、その重さは大変だろうと思うのは私だけだろうか。

(母子愛育会家庭指導グループ)